

コロナが明けて本格的に開催できるようになった夏祭り。しかし、少子高齢化や担い手不足などの理由で、日本では中止や縮小をせざるを得ない地域が相次いでいるそうです。内子町も同じような課題を抱えています。町内各地で夏祭りが再開し、久しぶりに見られた笑顔がたくさんありました。

今回は「内子笹まつり」「小田燈籠まつり」「寺村山の神火祭り」「いかざき花火大会」の4つの夏祭りの裏側を追いかけてみました。祭りの裏側で汗を流す人たちの姿と想いを紹介します。

夏の笑顔をくれる 裏方のヒーロー

特集 Special Feature



1_竹を立てるのに大人4人がかりの力が必要 2_一本一本、竹の枝打ちをする 3_長さ12mもある竹を担いで運ぶ 4_炎天の下、作業は続く 5_雨への備えをする



6_ランタンが目立つよう、電球を外す気配り 7_加戸病院が制作した手の込んだ笹飾り 8_実行委員会が制作を依頼した71体の飾り。色とりどりできれい 9_うれしそうな表情で飾りをつるす商店街の人たち

＼内子本町通り商店街の皆さんにインタビュー／



山岡あけみさん
＝内子2＝

世代を超えたコミュニティーの場

今年は自分たちで竹を立てることができず、実行委員会にお願いすると「力仕事は僕らがやるよ」と快く引き受けてくれました。商店街のみんなに助けられ、ありがたかったです。私もできることで協力しました。準備は大変だけど、休憩でお茶を飲みながら若い子たちと話す時間が楽しかったです。世代を超えてつながれるコミュニティーの場でもあり、大切にしたいです。



電線に当たらないように竹の傾きを確認

僕も商店街のみんなと盛り上げたい

小さい頃から笹まつりの準備をする父の背中を見てきたので、自然と手伝うようになりました。商店街の皆さんとの作業は面白いし、僕も同じ裏方の仲間として迎えてくれるのがとてもうれしいです。大学を卒業したら、地域の外でいろいろな経験を積んで、いつか地元に戻ってくる予定です。同級生にも僕と同じ思いの子たちがいるので、そのときは実行委員の皆さんと一緒に祭りを盛り上げたいです。



ゆうたろう
大西優太郎さん
＝内子4＝



竹に飾りをつるす作業を手伝う大西さん(左)



内子笹まつり

「たくさんの笑顔が見たい——」 みんなの心に届いた裏方の願い

今年で64回目を迎えた内子笹まつりには約1万5,000人が来場。久しぶりに内子本町通り商店街に並んだ笹飾りが、たくさんの人たちを喜ばせていました。その裏側を支えたのは、内子笹まつり実行委員会の皆さんや商店街の人たちです。笹まつりへの思いやこれからについて話を伺いました。

先輩の背中を見て育んだ祭りへの思い、次の世代にも——

4年ぶりの本格的な笹まつりは多くの人でにぎわい、たくさんの笑顔があふれていました。大西くんや自分の息子など若い世代が参加してくれたことにも意義を感じ、再開できてよかったと思っています。

私が実行委員会に入ったのは24歳のとき。一番の若手でした。たくさんの先輩たちに囲まれ、作業などの後には飲み连接到いてもらい、かわいがってもらいました。息子たちの姿を見ると、懐かしい思い出がよみがえります。

当時の笹飾りの数は、今の倍以上はありました。各店舗が作った豪華な笹飾りが連なり、とても華やかでした。

でも最近では店主の高齢化で、各店で準備することが難しくなっています。足りない分は実行委員会で準備しますが、今年は飾りは71体、竹は41本も用意しました。どちらも過去最多です。笹飾りの負担を減らすために、ランタンをつるす工夫などもしました。できる範囲の準備でしたが、お客さんからも好評でほっとしています。

やめる選択をしないのは、子どもの頃から父や大人たちの頑張る姿を見てきたからです。商店街がにぎわい、子どもが走り回る姿を見ると、このために頑張っているんだと分かります。この良さを次の世代につなげられたらうれしいです。



内子笹まつり実行委員長
ひろゆき
宇都宮啓之さん＝内子2＝

寺村山の神火祭り

200年の歴史を誇る、寺村山の神火祭り。コロナ禍などの理由で火文字や花火などの催しはできていませんが、伝統的な行事は守り続けています。

山の神火祭りは、寺村地区が3つの組に分かれて、輪番で伝統行事を行っています。今年中は通り1区・堂村が当番で、私はその代表である「宿」を務めました。

今年の開催を当番組の全員で相談したときに、若手からは「なんとかやりたい」という声が出ました。しかし、3年間のブランクはともにも大きく、もう一度腰を上げるには何倍もの力が必要でした。私たちの当番組は特に高齢化が進んでいます。何千とオヒカ리를灯し、山に単管を組むなど、その大変さと思うと大規模な開催に踏み切ることがで



当番組(中通り1区・堂村)「宿」 坂本 利夫さん＝堂村＝

コロナ禍でもつないできた200年守り続ける伝統の灯

きませんでした。――。

ですが、江戸時代から続く伝統的な行事は毎年行っています。当番組の人たちで六角山に登って念仏を唱え、日暮れには山の下に108つのオヒカ리를灯しました。住民みんなで受け継ぎ、大切にできたことだから、無事にできてほっとしています。

楽しみに待っている人たちの声や、町内各地の夏祭りの再開にも背中を押され、来年の火祭りは地域で前向きに考えています。地域外の人から「手伝うよ」と声をかけてくれることもあり、本当にありがたいです。みんなの協力なしに祭りはできません。担い手が不足する中で、どうやって続けていくか真剣に話し合うときがきています。地域のみんなで力を合わせ、つないできた伝統の灯を守っていき



1_六角山で山の神に手を合わせて五穀豊穡を願う
2_暑い中でも笑顔でオヒカ리의準備 3_山の神に酒や肴を供える 4_愛宕山にも登り、念仏を唱えた 5_オヒカ리의点灯をした当番組の皆さん



「フレカタ」を務めました／



水田 直也さん
＝中通り＝

みんなで支え合って火祭りを残したい

火文字の点灯や駐車場の整理など、催しの手伝いは毎年しています。今回フレカタ*の役目を引き受け、初めて伝統行事に参加しました。分からないことも多くありましたが、先輩たちが教えてくれました。火祭りは寺村の人たちにとってかけがえのないもので、苦労してでも残したい。力仕事や仲間集めは僕らに任せて、先輩たちには歴史や伝統を教えてほしいです。そうやって支え合いながら、残したいです。



六角山のほこら周辺を、率先して草刈り

小田 燈籠まつり

コロナ禍で開催が危ぶまれたものの、新しい形で再スタートを切った小田燈籠まつり。根っこの部分は大切にし、時代に合う方法を考えました。



小田燈籠まつり保存会会長 納堂 邦弘さん＝小田下＝

小田地域みんなで作りたい持続可能な祭りのカタチ

祭りを続けるために、時代の変化に合わせて形を変える工夫が必要でした。小田燈籠まつりの組織が新しくなったのも、その一つです。以前は小田中央商店街が主催していた祭りですが、高齢化の影響もあり、コロナ前と同じ体制で祭りを続けることは大きな負担となっていました。

主催者側がしんどい祭りは続きません。現役世代が日中仕事を休んで準備をすることは難しいのが現状です。少し形が変わっても、祭りの根っこの部分を大切にして、「できる範囲で無理せず楽しむ」と。それが燈籠まつり保

存会の最初の一步でした。準備は強制でなく、「できる人でやろう」と呼びかけると、小田地区の皆さんはもちろん、地区外の人や小田分校生なども手伝ってくれました。

新しい燈籠まつりは昔のようないくつかはあります。でも、燈籠流しで亡くなった人を弔うことや、里帰りの人たちも一緒に楽しむことなど、根っこの部分は残るよう心掛けました。多くの人が「やってくれてありがとう」と声をかけてくれて、大切なことが何かを改めて気付かされました。

地域の祭りを考えることは、地域の未来を考えることにつながります。同じ時間を共有し、一緒に汗をかく一体感は、他ではなかなか味わえません。この盛り上がりをもた来年も続けるために、小田地域の祭りとして協力者が広がればいいと思います。



1_倉庫から4年ぶりに出した大絵燈籠 2_川に流す燈籠を準備する小田校生 3_地元の皆さんも作業を手伝う 4_小田校生が描く大絵燈籠。登貴姫伝説がモチーフ (1～4写真提供：鳥谷恒希さん)



燈籠まつりに参加した皆さんにインタビュー／



寺岡 和一さん
＝中田渡2＝

納堂さんの思いに賛同

納堂さんの思いに胸を打たれ、私も応援したいと会場設置の準備や片付け、交通整理をしました。これからもできることで協力したいし、喜んで手伝いたい。燈籠まつりが小田地域の活性につながればうれしいです。



宮内 もなさん
小田分校1年

大好きな地元の祭り

大絵燈籠の制作に参加しました。小学生の頃に見た美しい大絵燈籠が心に残っていて、絵が描けるのも、大好きな地元の祭りの再開もうれしかったです。当日は地域の人たちが喜んで見てくれました。また来年も描きたいです。

打ち上げはひととき、準備はひと月、 花火の思い出はいつまでも

半世紀以上も続いてきた五十崎の花火大会の中止を知って、立ち上がったのは地域の若手でした。商工会青年部の五十崎支部を中心に、いかざき花火大会実行委員会を立ち上げ、開催に奔走した皆さん。その思いとは――

みんなで上げた大花火

「あの光景がなくなるのは寂しい」。60年もの間、花火大会を続けてきた五十崎商工連盟が継続を断念したという情報を知り、率直にそう思いました。子どもの頃から、お盆で帰省した親戚たちと一緒に見上げた花火。あのわくわく感は楽しい思い出として、ずっと心に残っています。何とかしたいと仲間の声かけると、「子どもたちにも同じ景色を見せてあげよう」と、一度は消えかけた花火大会を復活することになりました。

いざ始まると準備は大変で、今まで続けていた前主催者の皆さんへの感謝の気持ちも自然と湧いてきました。寄付のお願い、交通整理の手続き、看板の設置――。花火の価格は約4割も高騰しています。実行委員のみんなと奔走しながら、続けて行くことの大変さを痛感し、メンバー一同、身が引き締まる思いです。協力してくれた人や来てくれた人にも感謝です。自治会長と区長の集まりに参加し、僕らの花火への思いと寄付への協力を伝えると、大きな拍手で背中を押してもらいました。花火大会では、最後に観客の皆さんから歓声と拍手が沸き起こり、その光景に涙を流すメンバーもいました。例年と同じ2000発の花火でしたが、僕らにとっては感謝の気持ちが詰まった、いつもと違うものになりました。みんなが大好きな五十崎の花火を、何十年後も打ち上げられるよう頑張ります。



いかざき花火大会実行委員長
久保 和賢さん = 豊秋町 =

あなたにはどんな夏祭りの思い出がありますか。家族や友達と過ごした楽しいひとときの裏側には、きっと裏方の皆さんの思いがあったのだと思います。今回取材した皆さんも、大変な作業をしながらも「みんなの喜ぶ顔が見たい」「ふるさとの夏祭りを守りたい」と笑顔でした。祭りの表舞台では気付きにくいけれど、来年の夏は裏方のヒーローにも思いをはせてみてください。

「去年よりも楽しい
夏の思い出ができたよ」



お兄ちゃんと一緒に花火のカウントダウンをしました。「ゼロ！」って言った瞬間、大きな花火が空いっぱいに広がって、とてもきれいでした。来年の花火も楽しみです。
宮部 夏海さん(天神小4年)



1_豊秋河原の土手沿いに杭を打っていく作業 2_女性部が並べたハート型の行灯 3_交通整理の看板を設置 4_お客さんとの交流を楽しむ 5_いかざき花火大会実行委員会の皆さん